

台湾人日本語学習者の相づち表現 —滞日経験のない上級学習者の場合—

柳 川子

要 旨

日本語の相づちの習得には、日本語母語話者との接触の機会や自然会話のインプットが重要な役割を果たすと思われるが、日本国外の学習者にはこのような機会が限定されている。こうした環境で、学習者がどのように相づちを習得していくのか調査したものは管見ではあまりない。本稿では、長期に日本滞在経験のない台湾人日本語学習者を対象に調査を行った。面識のない日本人との電話会話をデータとし、学習者が実際にどのような相づち詞を用いるか、日本人のデータと比較しながら相づち詞の種類に注目して分析を行った。その結果、母語話者は敬意の高い「ハ系」が一番多く用いているのに対して学習者は敬意の低い「ン系」を多用している傾向が観察された。また日本人にも学習者にも「エ系」の使用割合が低いということが窺われた。さらに日本人に使用されている、話し手の話を聞いて、自分の感情や驚きを表せる「ヘー系」は学習者にあまり用いられない傾向がある。

【キーワード】相づち、種類、感声的表現、概念的表現、台湾人日本語学習者

1. はじめに

日本語の相づちの習得には、日本語母語話者との接触の機会や自然会話のインプットが重要な役割を果たすと思われるが、日本国外の学習者にはこのような機会が限定されている。こうした環境で、学習者がどのような相づちを使用しているのか、実態調査したものは管見ではあまりない。本研究では滞日経験のない台湾人日本語学習者が実際にどのような相づち詞を用いているのかを考察したいと考え、短期の旅行以外に長期日本滞在経験のない、上級と見なされる5人の学習者を対象として日本人との電話会話を録音した。また日本語母語話者とのような違いがあるのかを見るため、同様の方法で4人の日本語母語話者のデータも採集した。本稿では相づちの大半を占める相づち詞の種類に注目して、分析を試み、今回の資料に限って、得られた結果を報告する。

2. 先行研究

相づちが本格的に研究課題にされるようになったのは1980年代以後のことである。1980年以降の先行研究に水谷(1984)、小宮(1986)、黒崎(1987)、今石(1992)などがある。相づちの機能、表現形式、頻度、タイミングなどの項目が取り上げられて、多くの相づち研究がなされてきた。分析の対象は主に日本語母語話者が使う相づち表現である。近年、日本語学習者を対象とした研究は盛んになってきて、堀口(1990)、渡辺(1993)、簡(1994)、向井(1998)、窪田(1999a ほか)、楊(1997 ほか)、佐々木(2002)などがある。

3. 問題の提起

これまで見てきた研究は主に滞日経験のある学習者を対象とするもので、滞日経験のない学習者を対象とした相づち研究はまだ少ない。また、母語別の研究から見ると、英語話者を中心にする研究には向井(1998)、窪田(1999a ほか)、村田(2000)、ベトナム語話者については吉本(2001)、中国人学習者については楊(1997 ほか)などがあるが、台湾人学習者を対象にした研究は簡(1994)と佐々木(2002)の二編しか見つからない。簡(1994)は台湾の大学の日本語会話授業(一年生から三年生)に一週間ほど入り、学習者の発話状況を観察し、台湾語も含めて母語干渉の観点から気づいたことをまとめた。しかし、簡の調査では学習者が実際にどのような相づち詞を使用しているのかには目を向けられなかった。佐々木(2002)は来日したばかりの4人の台湾人学習者(自国で日本語を専攻し、2年から2年半の学習歴)と日本人との相談の場面での会話をデータとし、相づちの機能という観点から分析したところ、学習者は「聞いている」というサインを表す相づちが4割であるのに対し、日本人母語話者は理解や同意を表す相づちが半数以上を占めている結果が出ている。

以上の台湾人学習者を中心とする二編の研究では、母語の干渉、機能などの観点から分析を行ったが、学習者が実際にどのような相づち詞を用いているか、相づち詞の種類を中心とする分析は行われていない。また、これまでの先行研究では相づち詞の分類に関して、主に「感声的表現」を中心に行われてきたが、「概念的表現」まで詳しく分析したものはまだ少ない。滞日経験のない上級台湾人学習者における相づち詞の種類をより詳しく分析することによって、明らかになったことを海外の日本語教育に生かすことが本研究の目的である。

4. 調査方法

4.1 データ収集方法

堀口(1991)では相づちの変化に与える要因として、年齢、性別、話し手と聞き手の上下関係、話し手と聞き手の親疎関係、談話の目的、談話の内容、談話の流れなどがあげられている。相づちはさまざまな要因によって変化するため、本研究では条件を一定にするために、同じ年齢層(20代)、女性、同じ国の出身(台湾)、お互いに面識がない、身近な話題、被験者と対話する話し手は同一人物などの条件を設定した。

以上のように相づちを左右する要因を統一し、台湾人学習者と日本人(話し手が固定)の電話会話を録音した。なお、比較のための基準データとして、同じ条件で日本人同士の会話も採集した。家族、勉強、趣味などのような身近な話題に基づいて、10分間程度会話をしよう指示を出して、10分間になったら筆者が終わりの合図を出した。そのようにして、合計学習者5組、日本人4組、1組10分ほど、総計ほぼ90分の発話資料が得られた。

今回の調査で電話という手段を選んだ理由は二つある。一つは電話会話では相手が見えないので、頻繁に相づちを打って、話し手に「聞いているよ、はい、次どうぞ」などのような信号を送ることが期待されるためである。もう一つは、頷きや微笑や驚きや視線といった非言語行動も相づちとして機能すると考えられるので、それらの非言語行動を排除するためである。

4.2 被験者

台湾人被験者5名全員は観光や短期ホームステイ等で日本をたずねたことがある以外には、長期間の日本での生活経験がない。調査時点までの日本語学習歴は4年8ヶ月、流暢に日本語を操ると見なせる上級学習者である。比較データの母語話者は全員大学3年生である。また親疎関係の考慮で全員お互いに面識がない。表1参照。

表1 日本人(A)(B)のそれぞれの聞き手

話し手	聞き手
日本人(A)	学習者5人(T1、T2、T3、T4、T5と表記する)
日本人(B)	日本人4人(J1、J2、J3、J4と表記する)

*話し手の日本人AとBは違う人。分析データとしない。

4.3 相づちの定義

相づちの定義や取り上げる相づちの形態は研究者によって異なる。本研究は小宮(1986)とメイナード(1993)の定義に従って、相づちとは話し手が発話権を行使している間に、あ

るいは話し手の話が終了した直後に聞き手が送る短いものであるとする。また話し手が順番を譲るとみなされる反応を示したものは相づちとしない。本研究では「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」「意見・感想」を相づちと見なす。

4.4 分析方法

学習者が実際にどのような相づちを用いるのかを見るために、調査で得られた被験者のデータを以下のような手順で分析した。まず楊(2001)に基づき、会話に現れた相づちを「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」「意見・感想」に分類した後、相づちの大半を占める「相づち詞」を小宮(1986)に基づいて「感声的表現」、「概念的表現」、「感声+概念的表現」^{注1}の三つに分け、そのうちの「感声的表現」を更に「ハ系」「エ系」「ア系」「ン系」「ホー系」「ヘー系」「フン系」「その他」に分類し、分析を試みた。

5. 分析結果

5.1 相づち詞の分類

表2と表3は分類の結果である。

表2 異なり相づち詞(学習者)

	T1	T2	T3	T4	T5	平均
感声	8	10	11	8	12	9.8
概念	2	2	4	11	6	5
感声+概念	6	5	2	6	6	5
合計	16	17	17	25	24	19.8

表3 異なり相づち詞(日本人)

	J1	J2	J3	J4	平均
感声	17	14	14	10	13.8
概念	1	3	7	1	3
感声+概念	4	8	11	3	6.5
合計	22	25	32	14	23.3

表2から分かるように、学習者が使用した相づち詞は16種類の人(T1)から25種類の人(T4)までと個人差があるが、5名が使用した相づち詞のバリエーションの数を平均すると約20種類の異なる相づち詞が使われており、日本人とあまり変わらないという結果を得ている。この結果から学習者は日本人と同じように何種類かの相づち詞を使い分け、1つの相づち詞で押し通すということはないと言えよう。

学習者が使用した相づち詞の種類は日本人とあまり変わらない結果になったが、学習者と日本人は実際にどのような相づち詞を使っているかを調べるために「相づち詞」を系別に分類する。

5.2 感声的表現

相づち詞の使用における学習者と日本人の相違を細かく観察するため、小宮(1986)の分類を参考にし、「感声的表現」をその形態から「ハ系」「エ系」「ア系」「ン系」の他に、「ホー系」「へー系」「フン系」「その他」に細分化する。(資料(1)(2)を参照)

「ハ系」：ハイ、ハー、ハイハイ

「エ系」：エエ、エエエ

「ア系」：アー、アーアー

「ン系」：ンー、ン、ウン

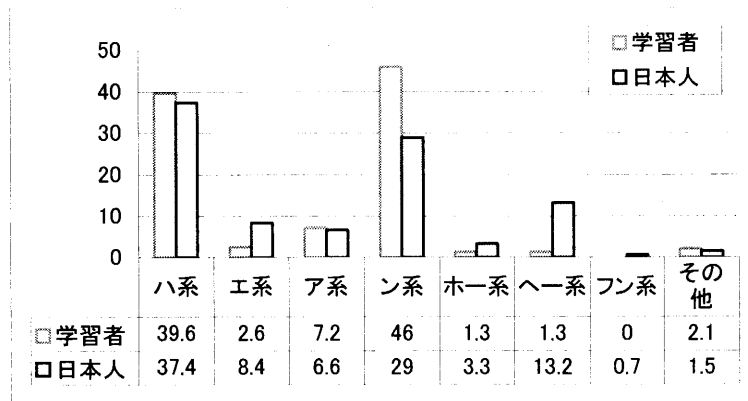
「ホー系」：ホー、ホオー、ホオー

「へー系」：へエー、へエ、

「フン系」フン、フンフン

「その他」：オー、ネエ、ワーウ

グラフ1 感声的表現の系別使用割合(学習者と日本人)



左のグラフ1は学習者と日本人による「感声的表現」の系別使用割合である。グラフ1で示されるように、日本人の場合、「ハ系」の割合がもっとも高く、37.4%となり、2番目は「ン系」の29%であり、次の三番目は「へー系」の13.2%である。学習者の使用割合は日本人と異なり、「ン系」はもっとも高く、46%となり、それに次いで「ハ系」が39.6%であり、三番目は「ア系」の7.2%である。学習者の「エ系」使用割合は非常に低く、わずか2.6%であり、一回も使用しなかった人が2名(T1、T3)いる。日本人の「エ系」使用割合は学習者よりやや高いが、まったく「エ系」を使わない人(J3)もいる。逆に多く使用している人(J4)もいる。

学習者の使用割合は日本人と異なり、「ン系」はもっとも高く、46%となり、それに次いで「ハ系」が39.6%であり、三番目は「ア系」の7.2%である。学習者の「エ系」使用割合は非常に低く、わずか2.6%であり、一回も使用しなかった人が2名(T1、T3)いる。日本人の「エ系」使用割合は学習者よりやや高いが、まったく「エ系」を使わない人(J3)もいる。逆に多く使用している人(J4)もいる。

5.3 「概念的表現」と「感声+概念的表現」

学習者が使用した「そうです」のような「概念的表現」と「あー、そうですか」のような「感声+概念的表現」の相づち詞を分析するため、この二つのカテゴリに分類されたものをまた「感声的表現」と「概念的表現」に分けて集計した。例えば、「あー、そうですか」という相づち詞の「あー」は「感声的表現」に、「そうですか」は「概念的表現」に分類される。その結果は表4と表5に示す通りである。なお順位は使用人数によって決めた。使

用人数が同じ場合は使用回数の多いほうを上位とした。

表4 感声・概念的表現の内訳(学習者)

			使用 人数	総 回数
感 声	1位	あ、あー	5	22
	2位	ん、んん	4	7
	3位	はい	3	12
	4位	え、えー	1	1
	4位	お	1	1
概 念	1位	そうですね	5	19
	2位	そうそうそう	4	13
	2位	そうです	4	13
	4位	そうですね	4	7
	5位	そう	3	11
	6位	そうですよね	2	17
	7位	そうそうそうそう	2	3
	8位	そうですね	1	4
	9位	そうですね	1	3
	10位	そうそう	1	2
	10位	そうですね	1	2
	10位	そうですよ	1	2
	13位	そうだね	1	1

表5 感声・概念的表現の内訳(日本人)

			使用 人数	総 回数
感 声	1位	あ、あー	4	25
	2位	はあ、はあー	3	5
	2位	ん、んん	3	5
	4位	はい	1	1
	4位	え、えー	1	1
	4位	お	1	1
概 念	1位	そうですね	3	14
	2位	そうですね	3	11
	3位	そうですよね	3	8
	4位	そうか	2	3
	4位	そうなんだ	2	3
	6位	なるほど	1	3
	7位	そうですね	1	1
	7位	本当に	1	1
	7位	そうですね	1	1
	7位	そうです	1	1
	7位	あれれれ	1	1
	7位	そうです	1	1
	7位	そうですね	1	1
	7位	ですよ	1	1

まず、「感声+概念的表現」の中に出現した感声的表現を見ていく。使用順番からみると、学習者の場合は、「あー」、「ん」、「はい」、「えー」、「お」、の順番である。この点は日本人とまったく同じである。ここで注目したいのは日本人が使用した2位の「はあー」は学習者に観察されなかったことである。

次に、概念的表現の部分を見てみよう。学習者5名全員に使用された「そうですね」は日本人の使用においては1名が1回使っているだけである。学習者の使用において2位の「そうそうそう」は日本人の資料には見られない。学習者の3位を占める「そうです」はただ1回だけ日本人に使われた。

逆に日本人の使用において回数多く、4名中3名に使用されている「そうなんですか」を使っている学習者は1名だけで、4回しか使われなかった。2位の「そうですね」は学習者はよく使っており、使用回数は7回で使用者は5名中4名である。3位の「そうですよね」は学習者は17回使っていて使用回数では6位であるが、使用者数は2名で半数以下である。

日本人に使用されたもので学習者の会話で使われなかったものは「そうか」「そうなんだ」「なるほど」「本当に」「そうなんです」「あれれれ」「ですよね」である。逆に学習者に使用されたもので日本人の会話に現れなかったものは「そう」「そうそうそう」「そうそうそうそう」「そうですよ」「そうだね」である。その中でも「そう」の重なる形は学習者に多く使用されている。

6. 考察

面識のない電話会話の場面では、母語話者は敬意の高い「ハ系」(37.4%)を一番多く用いているが、学習者は敬意の低い「ン系」(46%)を多用している傾向が見られた。この傾向は楊(1997)の調査結果と一致している。楊(1997)は中国人学習者に使用された相づちを分析したところ、フォーマルな場面にも関わらず「ン系」(楊1997は「ウン系」を呼ぶ)の多用が著しいという結果が出ている。中国語では日本語の「ン」や「ア」と似た発音の「嗯[n,ng]」と「啊[a]」が主な相づち詞として使用されている。中国語の相づちは日本語の相づちと異なり、待遇的な意味が含まれておらず、どんな場面でも使えるため、話し手との関係によって使い分ける習慣を持っていないと水野(1988)は指摘している。今回の結果では学習者の「ン系」と「ア系」は5割以上を占めていることから、上級レベルになっても母語の主要な相づち詞である「嗯[n,ng]」と「啊[a]」の使用の影響を受けていると考えられる。

「エ系」に関しては、学習者にも日本人にも「エ系」の使用が少ないことが分かった。特に学習者の場合は僅か2.6%と、かなり低い。この結果について、同じ中国語を母語とする中国人学習者を対象とした楊(1997)の結果と一致している。楊(1997)は中国人学習者は「エ系」を使用しない傾向があり、その原因として日本語の「エー」に近い中国語の「欸[e]」は相づち詞として殆ど使われていない点を指摘している。なぜならば中国語の「欸[e]」は日本語の「エー」と機能が異なり、傾聴の機能を持っておらず、普通は応答詞として答える時に使われるものからである。そこで「エ系」をあまり使用しない理由を母語

からの影響であるとしている。しかし、英語母語話者を対象とする窪田(1999)の研究でも学習者の「エ系」の使用は低い結果が出ている。母語を問わず、学習者が「エ系」をあまり使わないのは一般的な現象ととらえてもよいのではないだろうか。中国語母語話者だけではなく、他の言語を母語とする日本語学習者にとっても、「エ系」の習得が難しいのではないかと推測される。「エ系」の使用は単純な母語の影響だけではなく、まだ検証の余地があると思われる。また若者の「エ系」使用は年輩の方より少ないことから、話し手の年齢との相関が考えられる。これについては今後の課題としたい。

「感声的表現」については、日本人が三番目に多く使用している「へー系」は学習者に殆ど使われていないことが分かった。この「へー」という相づちは話し手の話を聞いて、自分の驚きや感情を表す相づちだと言ってもよいだろう。海外の学習者など日本人との接触の機会や生の日本人同士の会話を聞くチャンスが限られていることが多い学生達は、この「へー」という相づちを耳にすることがあまりない、すなわちインプットが少ないので使えないのではないと思われる。

「概念的表現」について、学習者に使用された「概念的表現」は全部で14種類あるが、その中から「そう」「そうそう」の重なる形を除くと、9種類となり、日本人の14種類より少なくなった。また学習者が「そうですか」「そうです」のような「ソウ系」を主に使っているのに対して、日本人は「ソウ系」のほかにも「本当に」、「なるほど」、「ですよ」など、いろいろな形で相づちを使っていることが分かる。また「そうそうそう」のような「そう」の重なる形は学習者に多く使用されたことに注目したい。日本語の「そうそうそう」と似たような機能を持つ中国語の相づちには「對對對 [dui,dui,dui]」が取り上げられる。ただ、日本語の「そうそうそう」は待遇的な意味を持ち、フォーマルな場面や目上の人あまり使わないのに対して、中国語の「對」、「對對對」という相づち詞はそのような制限がない。中国語では強く同意を伝える際、「對對對」のような重なる形を耳にすることがある。この母語の使用習慣がそのまま日本語の相づちに持ち込まれたと考えられる。一方、今回の日本人のデータでは「そうそうそう」の重なる形が現れなかった。確かに日常生活で日本人同士の会話を聞くと、この「そうそう」の重なる形がよく使われるようである。しかし、今回の場面設定は面識のない初対面の電話会話であり、そのような関係だとあまり使われないのではないかと推測される。この点に関して、日本語の「そうそうそう」と中国語の「對對對 [dui,dui,dui]」との対照比較についても今後の課題としてそれらの異同を明らかにしたいと考える。

「感声+概念的表現」については、相づち表現は「はい」「うん」など単独で使用されることが多いが、いくつかの相づち詞が組み合わせられて複合的に使用されることもある。多くは2つの組み合わせであるが、時には3つ以上のこともある。本資料では3つ以上が結びついた相づち詞が使用されたのは、学習者では2回、日本人では3回で、合計僅か5回であった。残りはすべて2種類の組み合わせである。学習者にも日本人にも一番多く使用された複合的相づち詞は「あー、そうですか」のような「あ(あー)+概念」の組み合わせである。続いて2番目に多いのが「ん(んん)+概念」の組み合わせである。日本人の使用において、2位を占めた「はあ(はあー)+概念」の組み合わせは学習者に観察されなかった。

7.まとめと今後の課題

今回は、滞日経験のない上級台湾人学習者を対象に、相づちの種類に焦点を当て、分析を行った。相づちの異なり数からみると、個人差はあるが、平均的にみると、学習者が使用している異なり相づち詞は約20種類であるのに対して、日本人が使用している異なり相づち詞は23種類である。この結果から、上級学習者は日本人と同じように様々な相づちを使っていることが言えるだろう。しかしながら、相づち詞の内訳を分類してみると、以下のような結果が出ている。(1)日本人は待遇性の高い「ハ系」を一番多く使っているが、学習者は待遇性の低い「ン系」をより多く使用している結果が出ている。(2)学習者にも日本人にも「エ系」の使用割合は低いという傾向が見られた。(3)日本人に使われている「ヘー系」は学習者にあまり使用されていないことが分かった。(4)学習者にも日本人にも一番多く使われている複合的相づち詞は「あー、そうですか」のような「あ(あー)+概念」の組み合わせであるが、「はあ(はあー)+概念」のような相づちの組み合わせは学習者に使われなかった。以上のように、本稿では、学習者が使用した相づち詞の種類を細かく分析した結果から、いくつかの示唆が得られたと思われる。

相づちは学習者が日本人と話したり日本人同士の会話を聞いたりするうちに自然に習得する可能性が高いと言われている。これは同じ被験者に追跡調査が必要である。今後、日本で勉強している台湾人学習者を対象とし、滞在期間によって相づちの使用にどのような変化があるかを将来の課題として取り組みたい。また学習者の相づちに対する使用意図を確認しなければならないと思われる。例えば学習者が「ハ系」ではなく、「ン系」を多用するのは相づちの待遇性が認識していないからなのか、或いは、相づちの待遇性は知っているが、気楽な場面なので「ン系」を使っても構わないと思っているからなのか、このよう

な学習者の使用意図をフォローアップ・インタビューから明らかにしたい。さらに異なる母語話者のデータと比べながら「ン系」と「ア系」の使用は中国語母語からの影響なのかどうかを検証したい。

注

- (1) 小宮(1986)は「ハイ」「エー」「ン」などのように、それによって指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現を「感声的表現」とし、もともとは概念を表す言語形式であるが、「ナルホド」「ホント」のように現在は感動詞的にも使われるような表現を「概念的表現」と定義する。本稿は窪田(2000)に沿って、「アーソウデスカ」などのような「感声的表現」「概念的表現」両者を含むものを「感声+概念的表現」とし、以上の二つに加えた。
- (2) 小宮(1986)は「ハイ」「ハーハー」などの「ハを含む」ものを「ハ系」、「エを含む」ものを「エ系」、「アを含む」ものを「ア系」、「ンを含む」ものを「ン系」と定義している。

参考文献

- (1) 今石幸子(1992)「談話における聞き手の行動—相づちのタイミングについて—」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』 pp.147-151
- (2) 簡振興(1994)『日本語の話し言葉の諸相—相づち表現を中心に—』台湾東呉大学日本文化研究所修士論文
- (3) 窪田彩子(1999a)「初級・上級日本語学習者の初対面時に使用する相づちについての—考察—」『日本語教育学会春季大会予稿集』麗澤大学 pp.179-184
- (4) ———(2000)「初級日本語学習者の相づち使用とその習得」『平成12年度日本語教育学会第1回研究集会』愛知淑徳大学 pp.1-6
- (5) 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所 pp.43-62
- (6) 黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150集 pp.15-28
- (7) 佐々木泰子(2002)「相談場面の会話にみられるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較—』平成10~13年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(1)研究成果報告書 pp.24-33

- (8)堀口純子(1990)「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号 pp.16-32
- (9)——(1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10巻10号 pp.31-41
- (10)水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集』第2巻言語学編 pp.261-279 三省堂
- (11)水野義道(1988)「中国語のあいづち」『日本語学』7巻13号 pp.18-23
- (12)向井千春(1998)「日本語の相づち 上級日本語学習者と日本語母語話者によるあいづち使用」1998年日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.116-121
- (13)村田晶子(2000)「学習者のあいづちの機能分析—『聞いている』という信号, 感情・態度の表示, そしてturn-takingに至るまで—」『世界の日本語教育』10号 pp.241-260
- (14)メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- (15)楊晶(1997)「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育』13号 お茶の水女子大学 pp.117-128
- (16)楊晶(2001)「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて—機能に着目した日本人との比較—」『日本語教育』111号 pp.46-55
- (17)吉本優子(2001)「定住ベトナム難民における相づち習得の研究—談話展開の観点から—」『日本語教育』110号 pp.92-100
- (18)渡辺恵美子(1993)「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において、使用された言語的あいづち—」『日本語教育』82号 110-122

<資料> (1)感声的表現の系別使用回数の内訳(学習者・個人別)

	ハ系	エ系	ア系	ン系	ホー系	へー系	フン系	その他	合計
T1	10	0	6	38	0	0	0	0	54
T2	32	2	7	10	0	0	0	1	52
T3	6	0	1	40	1	0	0	3	51
T4	8	3	1	17	0	1	0	0	30
T5	37	1	2	3	2	2	0	1	48
合計	93	6	17	108	3	3	0	5	235

(2) 感声的表現の系別使用回数の内訳（日本人・個人別）

	ハ系	エ系	ア系	ン系	ホー系	ヘー系	フン系	その他	合計
J1	14	4	4	42	2	14	2	0	82
J2	16	2	3	19	1	6	0	4	51
J3	60	0	9	12	0	13	0	0	94
J4	12	17	2	6	6	3	0	0	46
合計	102	23	18	79	9	36	2	4	273

(お茶の水女子大学大学院)

The Use of Back-channels by Advanced Taiwanese Students of Japanese
-The Case Study for Advanced Taiwanese Students of Japanese Who
Have Not Lived in Japan for a Long-term-

LIU chuan-tzu

In order to learn the use of back channels of Japanese, it is important to have contact with Japanese native speakers and expose yourself to their conversation. However, some students do not find such opportunities easily. There is not much research addressing how a student picks up “back channels” without access to those environments. We conducted a survey on Taiwanese students of Japanese who have not resided in Japan for a long-term. This thesis analyzes the data of the various forms of back channels used by Taiwanese students during their phone conversation with unknown Japanese. The data is compared to those used by Japanese native speakers. The result of the analysis was that while native Japanese speakers use more “ha-type” which is recognized as respectful form, Taiwanese students tend to use less respectful “n-type”. Moreover, both native Japanese speakers and Taiwanese students use less “e-type”. Furthermore, “he-type” which is often used among native Japanese speakers to express their emotion and surprise is not much spoken by Taiwanese students.

(Graduate School, Ochanomizu University)